井口家資料について

井口（いのぐち）　純一郎（じゅんいちろう）　　生年　慶応　元年　　１８６５

没年　昭和１２年７月　　１９３７

私塾師匠、郷土史家。慶応元年東高遠旧藩士の家に生まれ、諱を完純、号は精斎、俳号を桃の家、仙花、又 月の家、義山などという多くの号があった。
幼少の頃から高遠藩の学者岡村菊叟・松原葆斎の二師について和漢の学を修め長じて長野師範学校（現 信州大学）に入学、教員として各地の学校に教鞭をとった。
多才、多芸で漢詩や文章も優れていたが、特に和歌、俳句は宗匠として地方の後進を誘掖した。また政治・弁論・武道なども郷党青年の指導者となっていた。
教員を退いてから東高遠の私宅に家塾を開き、子弟の教育に当たったが、その博学と熱意を聞き伝え、郡内各地から教えを受けに集まった若人は、毎日6、70人に及んでいた。その間郷土史の研究に意を注ぎ、旧藩主内藤家の委嘱を受け、藩史編纂のため多くの資料を蒐集した。また、郡内各神社・寺院などの沿革を調査して、社格の昇格の資料を提出するなど郷土史の開拓につとめたが、昭和１２年７月７３歳で病没した。その翌年４０年間にわたり教えを受けた多くの門人が、東高遠殿坂の大手門後に純一郎の頌徳碑を建てた。その氏名を見ると郡下各町村から東京・神戸・京都など広域にわたる１３０名が上がっている。

－高遠町誌　人物編より－

この資料は井口家ご後裔の 井口和徳氏より平成２７年６月に寄贈された。

伊那市立高遠町図書館

果堂文庫について

上島善重は、安２年長岡村（現箕輪町）に生まれ、明治１０年の西南戦争に従軍し、その後累進して砲兵大尉となった。日清戦争が起こるや少佐に進み、第三軍の独立重砲隊の大隊長として、旅順攻撃に参加した。

退役後、高遠町に移住し、大正３年から６年まで町長となった。

在任中は、進徳図書館の建立に伊沢修二らと共に尽力し、果堂と号し郷土研究に趣味をもった。

善重は、少年のころより坂本天山に私淑していたが、殊に天山の砲術に関しては、自分も砲兵科であり、熱意をもって資料を蒐集整理し、事蹟の研究に打ち込み、後年信濃教育会が出版した「天山全集」の基礎をなした。

その他、高遠関係の資料多数を筆写整理した、数十冊にわたる「果堂遺稿」は、郷土史研究の貴重な資料となっている。

この「果堂遺稿」は、当図書館では「果堂文庫」と言っている。

大正４年、上島善重は９００冊からの図書を寄付している。

善重は、少青年時代は不遇で、学問には強い執着はあったが、学校へ入学も出来ず、さりとて書籍購入の資もなかった。思うように学問を修めるには書籍がいるが、今の少青年に自分の経てきたような悲をさせたくない。また、善重は、郷土史の研究に努めていたが、高遠は歴史もある上に、山紫水明の地で、また幾多の名士を出している。学徒の勉学には最適の地であるから、それに資するため図書を備えをおく要がある、というような考えで、図書の蒐集寄贈を計画していた。しかし、図書には限りもないから、先ず高遠にふさわしい図書、歴史関係のもの、又大部のものや、何人にも役立つようなものなど、いろいろ考慮して、長い間心掛け、次第に求めていた。

そして、大正４年、高遠図書館の書庫が完成したのを機会に、寄附をした。

平成１年３月

高遠町図書館

希月舎文庫について

中村家、伯先、元恒、元起三代にわたって、書かれたり集められた書籍は、一万冊といわれ、元起が弥六の遊学の資とするために、大部分は売却したが、まだ千点ちかく残っていた。

この図書の中には、坂本天山の自筆本や、蕗原拾葉やその他郷土関係のものが多いので、これを高遠にもたらすことは、心ある者の念願していたところであった。

中村家と交友のあった上島善重を介して、残存図書をことごとく高遠に委託するよう願った。その請を容れられて、昭和５年６月高遠に運ぶことができた。

中村家の図書は、蕗原拾葉１０８冊のほか、約５３０冊と５、６０点の絵図があったようであるが、書籍は５００冊で、３０冊不明、絵図はほとんど見受けられない。小学校管理時代に紛失したものと思われ、惜しみても余りあるものである。

「希月舎」は、元恒が高遠に移って、東高遠に住んだ時、月蔵山から出る月を待つ、という意味でつけた居住の名である。

（高遠町図書館　中村）

古書和本資料について

古書和本資料目録は、寄贈された和本の目録である。

このうち、「№.１～№.486」は、旧上伊那図書館（現創造館）に収蔵されており、その後、平成 27 年 3 月に
伊那市立高遠町図書館に移管されたものである。

また、「№.487」は、平成 28 年唐木氏より寄贈された資料である。

高遠囃子地方資料について

地方連の江戸末期、文化 15 年（1818）から昭和 40 年（1965）までの資料が目録になりました。約 200 年前からの鉾持神社例祭の記録です。

（１）鉾持神社の例祭四月十五日は最も厳粛な大祭であり、祭年と間年（まどし）に分かれ、祭年の四月十四日には三社の伊豆・箱根・三島の御輿が御旅所に発輿、十五日には本殿で厳かな式典を行い、正午御輿が西高遠氏子各町内を隈なく渡御した。各町祭連は、御輿祭列の役に高遠囃子及び山車を子供連が引いて、御輿を供奉し町内を練り歩いた。
十四日の宵祭には囃子の揃（そろい）といって、夕方より提灯を点け町内を練り歩き、祭りを盛り上げた。

（２）「はやし」と「俄（にわか）だし物」をだす母体は
＊一区・・・町方は十三町内あり、鉾持町・霜町・中町・本町・高砂町・横町・清水町・
新町・袋町・梅町・多町・相生町・稲持町、各町内毎に囃子があった。
＊二区・・・地方連は「八箇（はっか)」といって、諸町・常盤町・宮本町・番匠町・旭町・東町・下タ町・島畑の八町内の連合である。町方を取り巻く集落で、農業・山林業に従事する村方の連である。中に鉾持村という山持の集まりがあり、地方の実力者が揃っていた。

（３）高遠囃子
地方連の曲名
＊本ばやし「南蛮くずし」・・・静かに、ゆったりと演奏して町内を練り歩く
＊帰りばやし「御琴ばやし」・・賑やかに調子よく、テンポの速い演奏

（４）祭年に囃子を出す時は、総会により決定した。その年の三月か四月の初めに総会を開き、全員が「○」「×」で投票して囃子を出す、出さないの決定をした。
囃子を出す時の役員
・行司　一名　　・副行司　一名　　・会計　二名　　・外交　二名

（５）地方連　明治 33 年規約、昭和 30 年規約より

＊若連資格・・・十五歳～三十五歳までの男子で、八町内に在住する人。

＊祭の指導者・・大老五十歳以上、中老三十五歳～五十歳未満で囃子に指導力のある人に依頼した。

行司　1	会計　1	外交　2	副行司　1		
三味線 ——	笛 ——	太鼓 ——	大皮 ——	鼓	
10～15 人	5～6 人	4 人	6 人	20 人	計 56～61

＊囃子の隊列

笛・・・七穴使用

八箇（八町内）会員が七十名以上八十名未満時もあったから、上の隊列以上になった

場合もあったと思われる。

＊戦後囃子を出した記録

昭和 26 年 4 月 15 日　　行司　北原喜八郎

昭和 27 年 4 月 15 日　　行司　岡部　彦人

昭和 32 年 4 月 15 日　　行司　鈴木　和男

昭和 35 年 4 月 15 日　　行司　北原　保

（地方祭事連　昭和 40 年副行司　松尾　英人　記）

長坂凞家資料について

長坂凞家資料５２７点と、同家に残された書籍類５６５冊は、平成１４年の秋高遠町図書館に寄贈され、約６ケ月の整理期間を経て、目録が作成されたものである。

長坂凞家資料を大別すると、長坂凞氏の先祖数代に亘る人々が、内藤公に仕えた時代の高遠藩関係の諸記録と、長坂凞氏が、明治から昭和にかけての長い期間携わられた学校教育関係の諸資料、また、教員生活のかたわら、熱心に取り組まれた郷土史研究関係の諸資料、長坂家のあった旧的場村関係の資料、更には、長坂凞氏自身の趣味である短歌・俳句・書画などに分けられる。

高遠藩関係の記録の中には、高遠藩の御先手組に属して御供方を勤めたので、江戸への参勤行列帳、大坂加番の際の行列帳、更には江戸における火消し出動の際の行列帳などが残っている。また、御厩関係の勤仕の記録や、分一方関係の諸記録などがある。

教育関係の資料の中では、大正時代の長野県の児童矯正施設『海津学舎』における記録などが、珍しいものと思われる。『おやのつとめ』は、長坂凞氏の著作であるが、長坂氏はその中で、学校教育の成果は、家庭における両親の愛育の上にはじめて花開くと、家庭教育の大切さを述べている。

長坂凞氏の郷土史関係の著作には、『新撰高遠誌』『老女江嶋』「御子柴艶三郎伝」などがあり、これらの著作の元となったたくさんの調査資料が残っており、熱心で緻密な研究ぶりをうかがわせる。

書状類の中には、中村不折ほか多くの高遠出身者などからの年賀状や書状があり、与謝野寛（鉄幹）からの書状もあって、中に与謝野晶子の名刺も同封されていて、思いがけない発見であった。

書籍は、漢籍から歴史関係・医学関係・俳句・短歌・現代の小説本まで、長坂氏の趣味の広さを伺わせるものが多かった。

平成１５年２月　高遠町図書館

『長坂凞家』目録分類

資料番号　「１－１」～「１－５３１」　……資料目録

資料番号　「２－１」～「２－５６５」　……文庫目録

馬嶋家文庫目録について

馬嶋家に所蔵されていた書籍類は馬嶋家資料とともに平成14年に高遠町図書館に寄贈されました。

馬嶋家の祖先は、眼病治療で名高い尾張国馬嶋村明眼院（現愛知県大治町）で医術を身につけたといわれています。眼科医として松本藩水野家に勤仕していましたが、享保１０年に水野忠恒が改易となったために一時浪人となります。その後享保１３年、高遠藩主内藤頼郷の時に高遠藩に抱えられ、眼科医として勤仕することになりました。その子孫が代々高遠の眼科医とし勤仕し、て廃藩後も昭和の時代までこの地で開業し、眼科のみならず総ての病気に対応できる家庭医として、町民の信頼を集めた医家でした。初代柳泉は、俳諧も得意で号を『臨江』、俳号を『又玄』、字を『土江』といって、高遠藩上級武士の俳諧誌「山窓記」などにもその作品が多く載せられています。また、四代柳軒は『常春園』を名乗り、五代柳一郎は『樂齋』、六代利男は『晩成堂』と、代々歌俳諧謡曲など趣味も広く、好学の精神が受け継がれてきたことが窺えます。寄贈された書籍のなかでも、452 点、900 冊余に及ぶ写本は、数はもちろんその内容の多彩さにも驚かされます。古典文学や物語、伝記や軍記などの他、歌俳諧に関するものや、謡曲は本はもちろん、テーマ別に新聞等の記事の抜書きしたものや、記録などもあります。中でも、この地方に関係するものとして、阪本天山著作の「紀南遊嚢」や、星野常富の「武學拾粋２巻」「高遠記集成２巻」又、中村元恒著作の「尚友録」「尚武論」等の他、「西高遠町村誌」「東高遠町村誌（旧高遠城の図あり）」や「若宮権現旧記」「鉾持三社縁記」など資料的にも興味深いものが多数含まれています。

高遠藩時代からの系図

初代　柳泉（臨江、又玄、土江）	二代　啜江
三代　柳淵	四代　柳軒（常春園）
五代　柳一郎（樂齋　常春園）	六代　利男　（晩成堂）
七代　律司	八代　昭三

（高遠町誌・人物篇による）

写本の多くは「馬嶋柳一郎（樂齋）」「常春園」の印印があり、用紙は「常春園」と印刷されたものが多く使用されていました。江戸末期から明治時代にかかれたものと思われます。

（平成１７年３月　高遠町図書館）

蕗　原　拾　葉

中村元恒は中村伯先の子で、安永七年本郷（飯島町）に生まれた。大明、中書とも称し、中宗と号した。幼少より家学を受けていたが、伯先は天山の人物を慕い、元恒十五才の時よりついて学ばせ、月六回の講席があったが、三年間山寺から高遠迄三里を通って、一回も欠席しなかったという。

享和元年京都に赴き、医は名医中西鷹山につき、儒も父の学んだ岩垣竜敬や猪飼敬所に師事し、二年帰郷して上穂に開業し、文化五年大出に移った。

元恒は歴史を好み、殊に郷土史に深い関心を持っていた。移り住んだ大出村は、古の蕗原の庄であったから、その文献を蕗原文庫と称し、郷土史料の散逸を憂いて其の文献の蒐集校訂に着手し、その図書を蕗原拾葉と名づけた。巻末に「後の世のかたみの種と思ふまでふぶきの原に拾う言の葉」と題し、それより此の仕事をおこたらず、あらゆる方面の書籍を集めたり、筆写したりした。

四十九才の文政七年、高遠藩主の招に応じ、儒官に任じられ医学館をも督することになり、高遠へ移った。

中村元起は元恒の子で中箕輪村大出に生まれ、通称を忠蔵、黒水、又は半狂と号している。弘化二年、二十七才の時父元恒が職を辞したのでその後を継いで藩の儒官に任ぜられた。

元起は父元恒が計画をして完成を見なかった蕗原拾葉続編の編集に当たり、百五十巻の偏著に努めたが、その稿が終わらないうちに病魔に冒され、明治十七年六十五歳で逝去した。

中村元恒家の蔵書は一万冊といわれ、元起が弥六の遊学の資とするために大部分は売却したが、まだ千点しかく残っていた、この中には蕗原拾葉や其の他郷土関係のものが多いので、これを高遠にもたらすことは、心ある者の念願していた所であった。

中村家と交友のあった上島善重を介して、残存図書をことごとく高遠に委託するよう願った、その請を容れられて、昭和五年六月高遠に運ぶことが出来た。（中村）